



2010年3月25日放送

## プラスアルファにこだわる医療・寄り添う医療 その4

### 「がん哲学外来」が目指すもの

NPO 法人がん哲学外来理事長 樋野 興夫

#### 「がん哲学」とは

がんは、開いた扇のようなものであります。内なる1個の細胞の遺伝子がヒットしてがん化がスタートします。20年、30年、かかって臨床がんになると言われております。がん化の芽があっても大成するのは極めて少ないと考えられます。原因と言われる作用がどんなに強くても、受け入れ態勢がなければ病気は実現しないと考えられます。境遇がよくなると大成しないのであります。教育も同じであると考えます。細胞レベルでは大成するがんはまれな出来事であるということです。我々の体は60兆の細胞から成っているとされており、母数が大きいから、人間一生のうちに1個の臨床がんになるわけであり、熱い、冷たいという急性変化は容易にわかりますが、しかし緩慢な変化は難しいのであります。がん化もしかりであり、緩慢な変化の故にがんは早期発見が難しいと考えます。「災いが起こるのは、起こるときに起こるにあらず、よって来るとこ遠し」であります。ちょ

つとしたボタンのかけ間違いが大きく響いてくるのであります。

がんには原因があり、プロセスがあり、時間がかかる。ゆえにがんは予防と治療ができるという根拠もここにあります。初期の変異が経時的に分子の相互作用によって様々に変化にします。ちょっとしたボタンのかけ間違いで将来大きな変化が出ることを意味します。遺伝子診断にしても、何歳で病気が発症するかは確定できないのであります。初期状態が同じでも、外部から意識的に介入すれば「変えられる表現型」(ドラマタイプ)なるゆえに、病気は治療ができることとなります。遺伝子型が同じでも、一夜にして「変えられる表現型」があります。それは人間の風貌であり、教育効果はここにあると考えます。

がん研究の目的は、「人の体に巣くったがん細胞に介入し、その人の死期を再び未確定の彼方に追いやり、死を忘却させる方法を成就する」ことであると考えます。がんがあっても、がんでは死なないと思える、たとえば胃がんの患者がその胃がんでは死なないと思えば治療になるのであります。しかし、人間には最後に「死ぬという大切な仕事」が残っております。

がん病理学者・吉田富三は学園紛争華やかな時代の東大の病理学の教授でありました。学生の授業で、「人間はロビンソンクルーソーのように小島に一人で住んでいたのでは、よい人か悪い人かわからない。人間社会のなかに住ませてはじめて、その性が明らかになる。がん細胞もしかり。」がん細胞に起こることは、人間の社会にも必ず起こる。「がん細胞は増殖して仲間が増えると、周囲の正常細胞からのコントロールを脱し、悪性細胞としての行動をとるようになる。君たち学生諸君も似たところがある。一人一人と話すと常識もあり善良な青年に見えるのだが、学生自治会として集団行動をとると変なことを言ったりする」と語っております。「がん細胞にはそれぞれ個性があり、性格が不変なものと変わってしまうものがあります。がん細胞に共通の、あるいは最も本質的な特徴を見出す」のが吉田富三の命題であったということでもあります。これはいまも昔も変わらぬ命題であります。

医学部の学生の、希望により「がん哲学勉強会」がスタートしております。3年生、4年生を中心に、『私伝・吉田富三 癌細胞はこう語った』(吉田直哉 文藝春秋)を通読する読書会であります。私はこれまでに、南原繁著作集10巻(岩波書店)、新渡戸稲造の『武士道』(矢内原忠雄訳 岩波文庫)の読書会に携わり、「ちゃんと」「みっちり」をテーマに通読の大切さを学んできました。学生にも古典的な良書の読書会の学びを味わってもらいたいものであります。私は青春に寝る前に30分間、本を読む習慣を身に付けるようにと教えられました。この習慣の獲得は、人生の大いなる糧となっております。

「がん哲学」とは、若き日から学び続けている、南原繁・戦後初代の東大総長の「政治哲学」と、吉田富三元癌研の所長・東大の教授の「がん学」をドッキングさせたものであります。医療問題が盛んに議論される今日、「医者自らが問題提起することが重要であり、また意見だけを述べて動かない評論家に終わってはならない」と考え行動したのが吉田富三の思想であり、まさに「温故創新」、「故きを温ねて新しきを創る」であります。医療界のみならず教育現場にも必要な胆力であります。

私は「科学としてのがん学を学びながら、がん学に哲学的な考え方を取り入れていく領域がある」との立場に立ち、「がん哲学」を提唱しました。「がん哲学＝生物学の法則＋人間学の法則」であります。「がん哲学者」は、「高度な専門知識（がん学）と、幅広い教養（哲学）を兼ね備え、視野狭窄にならず複眼の思考を持ち、教養を深め、時代を読む具眼の士」である必要があります。これからはダブルメジャーの時代であろうと考えます。「がん哲学」の理念は、「世界の動向を見つめつつ、歴史を通していまを見ていく」こと、使命は「俯瞰的に病気の理を理解し、理念を持って現実に向かい、現実のなかに理念を問う人材の育成」であると考えます。「がん哲学者」とは、「高度な専門知識と幅広い教養を兼ね備えている人物のことであり、視野狭窄にならず複眼の思考を持ち、教養を深め、時代を読む具眼の士である」と先ほど言いました。私は『がん哲学から人生を読み解く』（ハーベスト・タイム・ミニストリーズ発行）ということで、『がん哲学ーがん細胞から人間社会の病理を見る』（to be 出版）という本を出版しました。「電子計算機時代だ、宇宙時代だと言ってみても、人間の身体の出来事と、その心情の動きとは昔もいまも変わっていないのである。超近代的で合理的といわれる人でも、病気になって、自分の死を考えさせられるときになると、太古の人間に帰る。その医師に訴え、医師を見つめる目つきは、超近代的でも合理的でもなくなる。静かで、淋しく、哀れな、昔ながらの一個の人間に帰るのである。そのときの救いは、頼りになる良医がそばにいてくれることである」と吉田富三は語っております。これが「がん哲学外来」の原点であります。

## がん哲学外来からメディカルタウンへ

順天堂医院で5回の試策で始めた「がん哲学外来」はすぐに予約で埋まりました。遠く県外からの参加も多く、大きな反響でありました。既存のがん相談やセカンドオピニオン相談とは異なるニッチ、すき間なのでありましようか。「がん哲学外来」は、対話型外来であります。患者の多くは、再発・転移をしており、家族同伴も多いのであります。一組の相談に60分を費やし、セカンドオピニオン外来を紹介することもあります。相談だけで患者の表情は明るくなることがあります。いかに医師の対応に不満を持っているか、主治医が真剣に向き合ってくれないかという怒りのような感情さえあります。なかには、病状の進行を知的かつ冷静に受け止め、残された時間をどう使うか、家族に何を残すかということまで決めてくる患者もいます。しかし、人間はそう単純ではありません。自分の考えを確かに伝えたい思いがあります。その思いを受け止めてくれる医師はいないものかと見回したときに変わった看板を掲げている、「がん哲学外来」は心開かれる存在として映ったのでしょうか。

病理学は顕微鏡をのぞきながら大局観を持つことが求められる分野でもあります。「がん細胞で起こることは人間社会でも必ず起こる」と、吉田富三は言っております。「がん哲学外来」は、「生きることの根源的な意味を考えようとする患者と、がん細胞の発生と成長に

哲学的な意味を見出そうとする陣営の外に出る病理学者の出会いの場」でもあります。「がん哲学外来」は、「ミクロからマクロの手順を踏んだ、ていねいな大局観を獲得する厳粛な訓練の場」でもあります。「余計なるおせっかい」にならない「偉大なるおせっかい」は、「他人の必要に共感する」ことであり、医療従事者としては微妙な違いとその是非の考察が課題となることでありましょう。また、「他人の人々に注意を向ける」には殺伐とした現代に「ひまげな風貌」が必要ではないでしょうか。名詞から形容詞への、静かに思う「静思」が、医療の共同体に向かう社会の「事前の舵取り」になる予感がします。「がん哲学外来」では、わずかな面談時間にさえ満足し、快活な笑顔を取り戻した患者も少なくないであります。その姿に接し、「がん哲学外来」の時代的要請を痛感します。「がん哲学外来」が、全国のがん拠点病院などに広がり、がん対策基本法や基本計画が掲げる患者主体の医療の「事前の舵取り」になれば幸いです。

死を目前にした患者を目の前にすると、自分はなんて未熟であろうと思うのであります。がん患者を尊敬できない医師により医療を提供することはできないと考えます。「人生茨の道にもかかわらず宴会」「曖昧なことは曖昧に答えるのが科学的」「勇ましき高尚なる生涯」といった言葉が支えになると考えます。がんは世界共通であります。がん細胞は顕微鏡で見れば同じ色であります。思想・信条も越えた人間の学問であります。『がん哲学』(to be 出版)が、中国語、英語に訳されている根拠はここにあると考えます。新渡戸稲造が東京大学入学面接の若き日に「我太平洋の架け橋とならん」と大胆に語った真髓が、「21世紀の世界の架け橋」として『がん哲学』に継承、具象化される予感がするのは私のみでありますでしょうか。

「理想の貧困、萎縮の予防法」は、「若者は大胆に語り、老人は勇気を持って実践する身近な模範の提示に存在する」のではないのでしょうか。がん研究者自身ががんをどのように理解しているかをていねいに真剣に語ることが学究者としての誠の社会貢献であると考えます。「緩慢にやってくる時代の狂気」に浸潤、転移されない処方箋は「がん哲学」にあると思われまふ。科学としてのがん学を究めることは、「森を見て木の皮まで見る」ことであり、「がん哲学外来」は、「ミクロからマクロまでの手順を踏んだ、ていねいな大局観を獲得する厳粛な訓練の場」であると考えます。「陣営の外」で日々気付かされる勉強であり、これが「時の徴」の学び方であるとも考えます。

私は島根県の出雲市大社町の小さな村で生まれました。その村は無医村で、子供時代は体が弱く、隣の村の診療所まで母親に背負われて行ったときのぬくもりがいまでも残っております。人生3歳にして、医者になろうと思ったのであります。それが臨床医にならずに病理学者になってしまったのであります。中学校はすでに廃校になりました。昨年、NHKテレビの「鶴瓶の家族に乾杯」に出た小学校は現在、全校生徒は9名であります。昨年の夏、私は「ようこそ先輩」で講演する機会が与えられました。妻子、そして89歳の父、87歳の母も参加してくれました。卒業以来40年以上の歳月が流れております。どんな小さな学校でも卒業式はあり、来賓が来ます。卒業式で来賓が札幌農学校のクラーク博士の「ボ

ーイズ・ビー・アンビシャス、少年よ大志を抱け」と語ったことを明瞭に覚えています。新渡戸稲造、内村鑑三は札幌農学校の二期生であり、『われ21世紀の新渡戸とならん』（イーグレイプ刊）の原点はここに 있습니다。「がん哲学外来」の風貌は「深くて簡明、重くて軽妙、情熱的で冷静」であると考えます。

競争的環境のなかでみな個性に輝きたいのでありましょう。どうしたら個性に輝けるのか、「複雑な問題を焦点を絞り単純化する」、がん化も単純であります。「自らの強みを基盤とする」、自分の専門職を持て、自分の懐中電灯を持たないと、人の懐中電灯を借りてもしようがないのであります。北極星みたいなものばかりを求めるのではなく、自分の懐中電灯で足もとを照らすことが肝要であります。そうすれば、人間は少しは腹が座ってくるものであらうと思います。「自分のオリジナルポイントを固めてから、後ろの吸盤を前に動かし、そこで前に進む」、「尺取り虫運動」であります。

「大いなる人物というものは、収穫物というものは、存命中に実を結んだものだけではない」のであります。「ゆえに後世に生まれた我々がこれを温故し創新することによって現代に貢献できる」ものと考えます。まさに「勇ましき高尚なる生涯」であります。病理解剖を通して、人間の誕生と成長ではなく、哀れと虚しさを基点とする病理学者は「真理そのものに悲哀性がある」と考えます。そのことを学び、「自ら悲哀をその性格とする人たらざるを得ない」と考えます。これが私の人生の原点であり、「がん哲学外来」の根拠でもあります。

「事前の舵取り」として時代を動かす三つのセンスは、「センス・オブ・プロポーション」、「センス・オブ・ユーモア」、「センス・オブ・チューモア」であると考えます。がんが国民病となった現在、最終的には日本の医療を変える「事前の舵取り」は「メディカルタウン」の姿に示されるのでありましょう。「メディカルタウン」は、言葉どおり、全体が「メディカルな街」であり、イメージとしてはかつての城下町のように天守閣が、この場合大学病院とか大きな病院ですが、その下には患者の視点に立ったホテルやレストラン、本屋などあらゆる施設がある。喫茶店には患者や医者が集いたまり場ともなる。この「メディカルカフェ」でがん相談を聞けば良い。「医療の共同体」がこれからの時代の方向性であると思います。日本国の医療は、「がん哲学外来」から「メディカルカフェ」、「メディカルタウン」へ向かう予感がするのは私のみでありましょうか。

「総合メディカルマネジメント」

[http://medical.radionikkei.jp/sogo\\_medical/bangumi.html](http://medical.radionikkei.jp/sogo_medical/bangumi.html)